繪本白狐傳

へ遠13
2501
10-2

北郭芳

遠
2501
10-2

阿也可之譚 巻之二

法橋玉山戯作併画

國量豊子を救ふ物語

橘乃ゆきさご原の浪間よりあらはれまし給ふ神の山住吉乃郷に跡をたれたまひ。神后の御霊を併せ祭らせ給ふ。住吉の神と尊ミ奉てまつる。桓武天皇乃時代まします。延暦二十二年しるや。此ゝ神ゝ級一位を授られ。其時乃神司。津守の連某を従五位

豊子安奈津守の館ゝ宿る

上より叙爵を賜ひ、車馬免されしより以来、
世、討爵の沙汰あづかり、此国司を重ねても猶五位
乃階を職し、七家の神官、三百餘家の社人を隷し、
造の美麗、親族家族の数多き、將國司郡司乃
富より矛盾なり、安奈出るとしも然らず、業四とれば、門
を守る奴隷うつうつと通じて、頓て四より四十あまりの女
房、紙燭うつうつ此方へ入りをまゐり、二人を率ゐて廣庭
の砌を過ぐ、殿中門を過ぐ、殿より小殿より請し、

豊子がまゐりより恭しく手をはさみて、主人連れふまい、
清原の息女の入きたらるる、驚きたるうるる侍ひ人寒
き夜の最中更ぬ、此所より先祖まし、明日
なん見参を入れ、ぐ、こうふるの様をうけのるを
宵ぐ、に心ゆるして労をすたれた
ぬ、手盧の大きなるに、炭火多く盛ぐ、拾そ、
二人中より出げ、豊子安ひまげ、焙ぐして、亀ぐる
手を温るに、煮ぐる、焼鹽ひ、ぐ、

藻なども。ふけ〳〵なれば。そこはかとなく。物さびしく。飢を
もよおさ寒さをさえ忘れて。あれ亦更なる男のほうふと
で。手指よおびえ。安奈さの女房よ向ひて。豊
匠。僕もいとふ男きく。眠るよ著ずやとおもふひ
ながら。もはや年寄こおのこ出おしし状よ伏人ハ。
面ぶせるうちよ。女房打ほうえ
て。理よ為て。二人が状の間よ。唐紙をいしし
隔ていとく休まえて。戸を閉て外よいでぬ。

安奈少しハ心落居て。豊子がかたよむひて畫より
のうちばらしよ。ようで男煩たまふんでやう寐
給へるしいとうえなしこハいよと
おもひなど。枕よ著て食引被ふれど。男と
いとくんのまづなしび。頓よ寐もやで畫よりの
さ物ふりハ。豊子が顔容のあてや
ふ仇し人のむけはもく意暴よもくく
て。男たん者のうちを卑て妻と呼び天

かゝまぐれ打ん子。浮世の望たりぬ愛しと思へ
ば。さらふ〳〵かゝのそ所。歎息の彩れ閑ゆ
へ。豊子姫も眠つまぐゝやとせをこゝもみけてはよ
ば。書しゝゝ嗟くなりゝわ。こは。夢よ懐ゝよゝて
と。かゝゝゝ押開。河子をおびえもつゝせまやや
かゝいふと。豊子立ゝ安奈ゝまとゝ。最痛へ泣
ゝ。かゝ氣疎ゝ人あゝ所よ一人憂のゝおりひつ
ま。いでう安くまぐゝまんや。所おそゝしゝ目
ゝせかゝゝんゝゝあゝゝば。ゝみゝふ敵の中よ捨殺した
まひはまぐゝや。打恨をかゝたゝで。安奈ゝ身骨をまゝ
くゝゝゝゝゝ。ゝゝへまゝん出ざゝしゝゝは。西あゝゝこゝし
弦のゝゝふゝのゝ孔。おのゝまぐゝゝの田苅水汲賤の
ゝゝ。ゝんゝゝあゝゝ上藉よいでゝ傍卧つゝふゝまゝゝん。
貴ゝゝゝゝゝゝ矣のゝゝゝて。ゝゝゝゝゝゝゝ孫ゝゝ
ゝゝゝ豊子打微笑ゝゝ。ゝゝ西ゝゝゝゝゝ人ゝて。
瓜の畑ゝ皆ゝいまゝゝゝゝ此小殿は。本殿廊廡をゝゝ

奇童秘戯を聞く

巻之二 六

さるのみ〳〵活分と妾の下は八鶏の巣さえりくるべい
今〻二人が分ハ生をしらて私情を
こ操とこそ〻〻も許人ろ日をゆるさんや妾も
〻の定まる夫ありこと新城のそひぶしハせこ
まぐも父君のゆるしまつる妹脊なをバ活分と二人
此小殿よ寵〻んよ過去たまる父上や此世を
立ん我夫よ何と云譯あるやいふさん。よる
たしあと哭雑よ〻しうと。分のそ〻ろ

なこと貞節をこそ云分ぐうそあさまし〻〻。
顔を蔽ひ分をまろだし。拜を奉ぐよ〻と泣よ。
安奈も涙〻ぐ〻。少もよ袂を志ぼりけ。豊子
が脊を撫ま〻ぐ介抱なしくるが泣寝入と
こ〻ろ。偖よ物音もせびいるる梦をやむなびめん。
冬の夜の三更もさすぶ由の空ふ〻ろ〻ろ〻
こ〻ろ〻しく〻おとせしをバ。豊子安奈も勉て
起るけるよ。朝食調ゝ捧げまる折しも係よ

人音の驚しきを。何子ぞと問ハ。神人等。社務と
むつまじく社頭を敬し。神楽を奏すること。毎朝
を而ア少き答へまつらるゝあつまる。社の方を望の
古いとうとうを聞ゆるごとくに聖くいと尊し。時
に窓の外を。幼稚らしてあるを。胸をうつこゝろも
多くこれ清浄潔白社務の活館へ。ゑを女を引入る。
不浄を仕ちしたるを忌らしくれと。唾をはく
ちの形の聞ゆるを。豊子も。安奈も驚きて窓の間

ちのぞきこれば。年ハまだ十ゝ九ばかりなる。色白
く眼もるどく。何ぞは凡人ならぬ面構したる童子乃
落葉をはらつぶやくなりを。豊子安奈ハ胸をさゝ
て坐しがたるがこゝろ。信太の神殿よりうたる御戸
言ひとりて豊子姫を脊に結ぶるが。引裂たるまゝに
優なる。やりあるを。豊子ハいとゝ恐ろし。神の活前
なる。恐つゝる戸帳を。裂ばいとゝ引裂くゝ。活
罰をこうむりあるん。今の言葉の仇言もたゞ住吉の

神の告させたまふあらんといふに安否。実にもおのが罪のほど。おもひ知られて[illegible]戸帳ハあらたに造り。納めたてまつるとも。いと易し。只此破れ戸帳まで[illegible]しとて。二人が引熨斗押畳まんとしつるに。裏の白布に粲然たる文字あり曰く豫捧寶前以救豊子難願主葛乗女と志るしたり。是をミるにともに驚くこと大かたならず。さるまゝもくて記せる。願主葛乗といへるハ。汝方のために何人にや問ど

豊子。さらに聞ることもなき名なりといへど。安否身の毛立て。戸帳の怪異といひ。童子の戯れ言といひ。不思議さのかぎりなければ。給仕せし下僕を招き。あれ落葉らく童子ハ何者ぞとたづぬるに。答ていふ。是ハ當國蘆屋の里乃農民の児なるが。生れ出る時。既に歯生ひたりと云。三歳より星の宿を察究め。五歳よりハ風雨のいたる[illegible]じめさとり知まらうされバ里中こぞりて神の化し所なりとて稱ぬ倩ハ

農夫まであくせんも年々怠なし。物あるハきんとく。
先の月より此社務孔頭マンしつらひたまへども直よ
人の隱さんとするをとく暗よすらく口中よ問ん
あかうはわかるよ。館の内乃人々悪をもて法則楽
が名をとじ道吉郎とハ中にとらふ。豊子安奈ハこの物
語よ。目と目とを見合。更よいふ座き言葉もなし。此時
社務國量社頭より館よ至り豊子安奈よ對面す
座しとく。客殿へまゐらしむ。豊子衣紋かい繕ひ。

前よもうくし坐よ着バ。安奈ハ次の間の板舖よゐ
しこまる。連國量豊子よ見え。あるまし物語をつぶ
さに冩。安奈ともちらくも絡さて厚き情を謝し。
両眼よ涙を浮め。安奈よむかひ申す。抑も此豊子
ハなつさなきし身の長のがくわと。こくてあらふれを添
たまへ。姫が父ハ。清原の夫雄といへバ。家は此馬のなかりし
が二十年前。和泉の司よ補せられ。隣の國よまかりし
より。都よりも隔たらくいまく親しく交あまししか。

豊子安奈津守を尋て京へ趣

豊子が母は故あつて此女を生て程なく行方なくなりて父春雄が愛をは母のなきに數そひて唯姫が生長と月と花とをたのしみとして後の妻の子継母と女とさまざまに仕へて なを制とるあるべき妻を恐れ父の春雄をも鬼神のごとく前に媒あり若狭の惣官紀の高浄が子二郎高保なる者を舘へむかへ豊子が婿がねとさだめ婚儀をあらんと謀る

春雄卒に病て忽に世を去りぬ継母が邪慾をさらに強く春雄が所領を婿の二郎にあたへしと おのが兄權治太夫丈る悪右衛門尉と密に謀る權治は元来貪欲の者悪右衛門は日頃此豊子に執心しれば喜んで継母が密謀に荷擔し春雄が家に朝廷より預り護らせたる籃籠内傳金烏玉兎の巻を人をして取らしむ其寶蔵の鍵を二郎が手笛り入れ籃籠内傳の盗人外に有と間

八二郎高保を疑ありと若狭なる又を頼りしか。
豊子を迫る。悪右衛門尉が妻をきんといぐむよし
聞しが終をうる大難を引出しぬ。是を案変
すうるあるさんハあしわど此社の神人板屋大宅を
けじら權治太夫を方人とする者多し。故ち
社人ハ家族といえども
豊子が安身を計るあるなしこに都
加茂の社ハ神官保憲といえる八豊子が号姻の夫。

二郎高保が外戚の叔父なり。當時天文暦學の博士
を兼朝廷の御覧うでうを謀らるたちけ。
足下此上とも労を厭ふなくば豊子を具して
ひそかに都をのがれ加茂の保憲を遂く豊子が
出世をもうもへうし此達をさはへ居しば今を
悪右衛門を探し出さるを二人とも憂目をあるべし。
〻〻用意あきうしたるまで安倉矢石の
中をかへ猛あるのがれ侍へば都をいかう何れ

煩ひの為にといで。國量ところびて。黄金白銀をこ
ぐくを吹り出して。路用にと安倉よりあたえ保憲へ
消息をはぐくし認めて。豊かに持しち保憲ちもより
函を轉じ〳〵吉〳〵の患をのがれて幸に寝る手段
あらんかぎりをおこなひてかなたこなたにたよりを求て
やがて音伝をもち侍るといふに豊子は唯涙に
ふくれ〳〵ふ咎る云の歌もなく伏拜うるぞせ
めてのこころおもふれあるを短き日蔭の西よりとひけば

竹輿のうるびたるに豊子をのせしち陸脚にて地
下農夫輿惣助平の二人でまりたるを暗の夜れ文を
こしてこ今を中くたりあれと豊子安倉も礼をのこ
おもきもれよりや此輿をかき出し安倍野の街を小へ
こしてでいそぐ体
悪右衛門尉安倉が家を亂暴きる物ごえ
和泉の國司清原の眞入春雄きし天暦六年九月
まりうれしも後室れもひとしていまこ豆表さえ

ゆくり行はば。春雄病もまし〻立ぐしと披露し。
朝廷の糸内ハ。家の老。伴の村次代〻是をたゝち。
甥の悪右衛門尉藤則ゟ家督を継しゟ清原の所
領を物さんゆく〻二郎高俣を追ちわゞけ。近ごろに
此旨朝廷ゟ奏し。本意を遂んとたゝ〻もるゟ豊
ゟ姫の行方さゝぐ。是ハ春雄が実の女とい。多〻が密
ゟをもよく〻ちりたゝ白地ゟ訴出るゞ。ゆゑしらず義
儀あるゞ。うほゟみれおそん〻たに〻失ひ捨ん

ゆくゝを。悪右衛門がゝしあるを戀慕して捨置ゞゝ
こゝ大ゟを。引出しゝるゟれ口惜れ〻。足摺して怒り
ぬるゞ。為方ゞるゞ。あまり乃やるゝこあるゝに豊ゟ姫ゟ
附居ゝる侍女婢女をそゞ〻〻〻いましゝ白砂ゟ
引ゝ〻まばゝ杖をゝつ〻〻〻鄭居おのゝ豊ゟと去〻せ
たゝゝあるゝ方人をこゝらく〻悪右衛門をゝしゝ
追人すむゝ兵士を我いりやゝ。終ゝの姫がゝゝ
ゝゝあひたゝゝとみゝゝ豊ゟと負ゝ去ゝゝる。

清原の後室侍女を責る

何者ぞ。追人を防ぐし下郎ども何奴ぞ。あるべき
よまふひべし。露ばかりも隠しなんよ。牛裂車斬乃
ごとき暇なんどゆゑ。馬つ擲ぐ。罪ぐるしは無慙
なりし。あるべきなり。侍女ホ彩をあげ。いかなる責いかなる
刑よあるべきも。きっと外よりはるばる。唯此
上の活情よ。ゆゆしく命をとりたまへと。伏まろびて哭
たわしは。目もあてられぬ。茅屋なり。後室の兄權治
太夫。傍よ。あるべき眉をしかめ。侍女の拷問もなるべき

なれば。心ばかりは豊ぶる行衛なり。殊よは手剛
奴僕の随ひ居るべきなれば。何等妨と成べ
かべ。遠く他国よ去るべ。ばかんど大なる端ある
べし。もやし国中の兵をとり集し。和泉はあり法
の国。河内あんどの国司ありて。本道間道の駅亭宿
るべ人數を伏べ。往還の男女とあるべ。海路の渡
里ありし。浦べの船を一所よあつめ。廳所を構べ船
戸をいべ人員を西し。備まをるべ操し需べ

んに。豊子に翼の生えしんハあらば。何處へか飛去るべき。
よしなきことに日を送りし。都にありしものゝばかりしんに悔る
ともおよぶまじければ。後室も寝られもせず。侍女等
と牢屋に繋せ。卒子国中の人夫を招きあつめる。
是豊子が館を出し其夜のうちなりければ。かまも悪
右衛門尉ハ豊子がゆくへあらしより。掌の中の珊
瑚を奪はれし心の嵐に散しおりしあり。其
時も手勢引具し追ふりしに。一人の奴僕に支られ

豊子が行衛ハ先に刺深沼の中に馬と倶にまろび
込見ぐるしくわらはれけれど。命の限りに豊子姫とし
らえんし追つかられけれ。折しも日暮物のあやめも
わかざれバ。其奴僕の行方さへ知らずなりて。歯を咬志
めて怒りでもせんかたなし。されど男に豊子をとかさ夏
く去るが。悪く忘れがたく。わずらふくらしてあり居たり
る。爰に伝太の邑の長に義田軍右衛門といふものあり。
日頃悪右衛門尉と心合く。睦び往帰りけるが。其羽立て日夕

ぐれよ。悪右衛門尉が屋形よ。あく〳〵ト。くるハ。僕らがハ
らも。ま〳〵告ト。づ〳〵。小鬼の。腹い〳〵。
介抱せ〳〵。まる〳〵。怠り〳〵。ゆ〳〵し。只今。まり〳〵。
君の豊子姫を追まい〳〵。畑の中ら〳〵。
為〳〵。いら〳〵。捕おわせ。いらやといふ。悪右衛門
頬面目を〳〵。あい〳〵。嘆息〳〵。言ひ。軍太。右衛門
再ひ〳〵。豊子姫を。脅ひ〳〵。主ら〳〵。ものハ。津
の国安倍野の農夫安太〳〵。老男。ものと。客ハ

知ら〳〵。ぬ。悪右衛門尉大ら〳〵。驚ら。彩此子
を。夢ら。ま〳〵。扨も。安倍野の農夫が。何ら〳〵
豊子を。ぐ。あひ。出ら。所。謂を。知ら。ト。ひや。軍太
右衛門。笑ら〳〵。云。豊子姫の。婿ぐ。よ。備ら。ものハ。
さら。知ら。せ。ら。ぬ。と。自ら。ら。い。ら。ぐ。ら。存知。為。
唯。おら。い。合ら。ものら。ハ。三歳。ら。ら。此安太。
月。毎ら。二度。あら。い。二度。信太。明神。よ。詣。で。為
を。何。の。祈。ひ。や。ら。ら。あ。ら。ら。よ。いつの間。よ。ハ

豊子姫を。そくのうし奉る謀計よく。神祐
でハ偽ものうとい。悪右衛門身をあらうして
憤つよ。ゝゝゝ土坎うれいぐ。安倍野邑よ押よせ安奈豊
子をうゝめ取礫すあしつをく軍太右衛門安奈が家
を紫内をよ。者等あを兵士等ばきつ門と。大音うゝ呼
ゝ。長刀提うみ出よを。軍を右衛門袂よとゞつゝ出しとゞめ。
安奈ハ墮夫青男うゝゝ侍へども。奴僕が早業鬼神
のごゝゝ。日ろれ道暗さて。按四きつゝる安奈主従取

避して悔をたまふる。悪右衛門ゆゝ腹あしく。
いよゝ憤つよ。一昨日の戰ハ曙途乃滑つるよ。深雪よ
馬を乘ハ是おりのうゝる不覚をとりかわ。たもあを
ゝ知ゝゝハ。此奴僕どゝゝよ斬ゝ踏躇。泥のごゝ
なし捨ん用あゝを豊ゝ人ゝ道ゝるべして。家
手兵をとゝるへしと。館よありあの兵卒二十余人をゝ
見ゝ。軍太右衛門を先よて。按ゝゝゝでで馳ゝ
ゝゝ。安倍野が郷よいれハとや初更の鼓ハ打ゝゝ。

悪右衛門妻奈が家を乱妨と

ぐんだゑもん
軍太右衛門
の夏雷神より裂きて、樹の丑北よりひくきうち
屋うて、安奈が住家うちゝ、そとゝ悪太郎門ゆ知して、
物音高くてハ逃去るやいなや竊り近寄、四のさはを
伺へゆく、ぬきと足して門の外より覗うれバ、脊ゞを
歯もぬけうる老婆の、苧とうるる側より斑〻三毛の
猫の眠りを居うゝ外より人氣もなし、兵士等四
五人ひとゝしと内よりふゝ、安奈ハ何處よかれうて、

あるゝうふまいせやうゝ拳ゝうて晩より老婆仰天
しゝ、両手をあけ倍〻いつ、婆ハ引し此隣の者うて孫
う、安奈の出奔せゝ引しゝ、一人の下夫も家と定て
親里へ帰りつゝ向い詩つうの家ゝうり此空家と護孫へ
し、郡司のもうせるより、扨こうり婆ハ来りゝ此家の
ゆハ、安奈のいづくよりありゝも、露だうとも志ばゝ
ゝゝせうゝゝ、うゝじい出ゝと、悪太郎門ゆの郊より
ありゝ、老婆が脇びうゝ、がうとつゝ倒しおの

此家よりなどし。他人ありて傍る条。奇怪なり。いとく
無ごとく。安奈ちが隠れ。家とくしたりいふ
ほどよ。納戸物置引放ちて掃もびも。元来あらぬか
るせきと家居。いづくよ隠るべき猥もなれば。悪右衛門
腹ふろよなりて。まや家を捨て去ちたりとおぼゆ
なり。責ての腹居よ。家の内ある雑具どもを砕く
捨ていふよ。二十餘人のつるものどもむくしこと立こ
鍋釜。竈。火桶。皿鉢。宋櫃。炭匱。箪笥。平笠ぶら

らくし。両戸障子ハ。ちりくし。散粉微塵ゆ歩
碎き。ちらばひまちる老婆をも。前ある豬へどくど
投ち。噇ち笑ふ。帰て名ゝ。傍若無人なる
ふるまひなり